講演【第１部】　18:05～19:05

高次脳機能とその障害

鹿　島　晴　雄（国際医療福祉大学保健医療学部）

高次脳機能障害という用語は，本来は行政用語として注意，記憶，遂行機能などの狭い意味での脳機能障害に対して用いられたものであるが，現在ではより広く失語，失行，失認他も含む神経心理学的機能障害全般をさす用語となっている．本講座でも高次脳機能障害を神経心理学的障害全般としてより広義に捉えていることをお断りしておく．

演者は“高次”脳機能を“意味にかかわる”脳機能と考える．例えば，発声や構音は意味に関わらない機能であるが，言葉を発することは意味に関係している．運動は意味に関わらないが，パントマイムや手指で道具を使うことは意味に関わる機能である．視覚や聴覚は感覚であるが，それらを介して対象を知覚すること，すなわち視知覚や聴知覚は意味に関わる機能である．“意味に関わる”機能の障害である高次脳機能障害は，その診断や評価に，以下の意味で精神医学的アプローチが欠かせないものである．

第一は脳損傷の局在である．高次脳機能障害（神経心理症状）は意味に関わらない機能の障害（神経症状）に比べて，損傷の局在においてある程度の個人差がある．第二はその症状の出現が抽象的状況と具体的状況とで差異があることである．失語を例に取ると，診察室で“ごはんが食べたい”と言うことを求められてもスムーズに言うのは困難であるが，実際にお腹がすいている時にはスムーズではないにしてもそれ程の困難なくしばしば言いうることがある．

これらはいずれも高次脳機能が意味を担う機能であるためと考えうる．脳損傷の局在にある程度の個人差があるのは，“猫”という言葉を例に取ると，“猫”という言葉はその人のそれまでの経験や体験と関連して頭に貯えられており，より猫に関する体験，特に情動的なそれを持つ人と，そうでない人では，同じ“猫”という言葉でも頭の中での貯蔵の状況は異なるはずであるからである．関連した体験の多い人はそうでない人と比べ，“猫”という言葉に関連する手かがりはより多いと考えられ，より失われにくいであろうからである．また抽象的状況でより症状が出現しやすいことも意味と関連している．実際にお腹がすいている時にはそれ程の困難なく“ごはんが食べたい”と言いうるのに診察室では困難であるということ，つまり具象的状況では言えても抽象的な状況では言い得ないという現象は，意味に関わる本質的な障害と考えられる．言葉とは意味を担う記号である．記号とは，実際にそのものがなくともそれを表せるから，つまり抽象的な状況でそれを表せるから記号なのであり，抽象的な状況で言葉が言い得ないということは，意味を担う記号としての本質的な障害といえる．

このように高次脳機能障害は，脳損傷の局在において個人差があり必ずしも脳画像だけでは評価しきれず，また症状の出現は状況依存的であり，症状の診断や評価には状況を考慮することが必要となる．これらのことは高次脳機能障害の診断，評価には個別的かつより心理学的なアプローチ，つまり精神医学的なアプローチが必要であることを意味している．

軽度のアルツハイマー型認知症のための簡便な神経心理学的検査法も紹介したい．